貝原町人囊

刊

和書門
類
二七七九一號
八八函
八架
四冊

内閣文庫
和書
類
二七七九一號
四冊
一八三函
一二架

内閣文庫
番號 和 27791
冊數 4 (3)
函號 183 524

国立公文書館
National Archives of Japan

町人囊底拂巻上

人のいまだいまだ久しからざるいなりしかども
おのずから世ありてかくのごとし此聖語をよく耳ふ
れしかばすでにあらかじめ
とくしりぬれば年月を
此身のおのずからなるこころえ
百千のたからをもつて
櫃をとくにあたはざるこれ
そなはらざる故のなげきなり
乃和さかしらをいうふ
なり

明治十三年購求

はなはだ人のいとなむを物ものしきことを思て
家童の袖よりおしいまを失ふもの多くいとなむも
むのとりてとかくて世よはたづうくしく
直の字に此國の言葉はたらふこゝろのまことを
とゞめてまことにいかゝらあるべきをもとめ曲まねきて
するをもとゝいへい本心の公の誠なるものをもとゝ
いへい身のうへさかれ四きはまりとて楽いたの
楽なるものくとものはたらきまことのこゝろ
つゝて意ある處あり
直い天理なり問ふこゝろそて直くんば千萬人といへた

吾ゆゑひとりなんつゝ天理を抱きてなり天理の味
方よい對する歌あるべし三德五常もみな直の
異名なるべし如しむべたなるれ萬國の道いつまう
質直のとゞめ給ふ本とせざるべき天地日月星辰
ひくるくわどり木火土金水おのく相生し相尅
しおこるいたてやむ時あるいみる天たらの直道也
又いるれさるあふかくしよいの又のるるふかくしに直きまま
そのまにわうこのうのうのうにあるに都て人の悪を
かくりわるいさに直きうのうちのまにあり是人れ本
仏自然の惻隱ふはゆゑなりなせてなり此ことをいう仏知ても

欲にひかれ氣に奪れて動けれバ己れから歪むる
いとくちおし直き木も曲れる枝もある世なれど人
をばゆがみせぬ先神のまな教を事とせバ直き本
にかへるべし
本朝の事ハ神と儒との二ツの外ハ多くハいらぬ也
あらはるべしいかさまにもそのけしき此國ハ智者なら
此國をのづから理を究し給ひそのはしへのまゝにし
して世に用ひらるゝやうを慮て此國の人ハならう
かなへきすなはちそのまゝにへて世にもちひ人も
ありてあそびしやうなるへき人の國より傳え

あらしまつれてあてひろめしも此國取つたる其の
ばらくれともふれさはりゆくさ後人の志わされおろ
ねやまゐせすることなりゆるかれハ如きれ厚らく
なれ神乃わざたるべしほそバ此國にもしまれしむ
まれさる人なずるハ此やまめて姿とかくこやまめて
ちうゐいひて知へにまろこし姿ぬうしと
いふ世こま字ハ本ハかしあれるすぐさとこそてお
らひ法てあつかどいゆよすくもぐさうはりきそ
やまめてありこしひしかれかしあきるハ大かさ
異ゆらみ見えてでやまめてわざよハ関ひべしそで

めづらしきをこのそ見ぬよりこいしむるぞ
あるべいなべいきをすぐ清くやとろあんぞ水
土乃理ふうをすぐさふく國人乃益も学乃
なを詩を文ゆれしかをいとろあしとろ
あしどをものづくりかいのやまをうのとぐと
ゆれしうしたれとくしろこと人乃ふこい碁國の
風雅のすぐれたりて絵をゆまんでやま
とふこしい和奇いいふよりと詩も此國のすぐふ
はくまれぞあまりあり和き安さたる此
とうあべいりこと人乃詩たりた此國して

和國の歌にて吟詠してあきれいかくとすく
はくまれはのみちも明くのこと異よりたる
こくあること人乃此國よりたがまけ
こい親の安ぬこそ聖のとぐさをれいよりと
あるあくしまでき紙何をかあるる姿形い
おのづふり悪しくあるや上よりいくあるも
こくこし容ぬこちいこてやまをとくこと
きれぞそのづくれやまをとくこと
ひをれこいこのふ乃ふるかろ碁國ふ
天地乃みちをしこくふうちこくれぞ

りんこと此聖の教い文字をとりて曉し吾國乃神
のをしへいやまねく語りあらはして文字ない古傳にうり
らひさらのかりとだに世てをうてより此國乃
學びをうるもの文字にのみ心をうばはれて語義の
さとりをうるもの少なしよって名乃實をも
みうしなひて此國乃人たちはをうへをうへ孔子
を聖人とやんをいふ心ばへ名は西へきんとのこと
まうしをんや我國乃やまとことばい名實乃
義をばけんどいふべき物にして此身をとへと
ふけく所事ひとつにつたり又萬物第一は

高日之尊乃の義天地乃至尊日の精靈とう
乃名なり此故に人は神魂い皆火氣に屬とり
もろこしにても此理あるにや日の字は古文ハ圓形
の中に一は字なりとうや何まは國にても人と
天地乃靈とし日月の德とうるへしりとする
にや人は一を活く大と一をとへ天と
をうへ人と二乃をあひ相離るる事なれ
を示と此理とりて此國の神道と唐の聖
教と極さ別にあるとうて紙をうめ
此國乃主をうる人をきみとして事い始祖いざなぎ

いざなぎ尊れ下のきこしめしてなすこと迄
きい陽音木氣みい陰音水氣なり陰陽の
神德とうつて國土萬民乃父母とうり給ひ
一切萬物をそなへ養ふと君くなぐく二柱
乃清神此國草木まて產出し給ひしと
いへも廣大仁德乃義とうや此なり神と
君と二つなきを事なれい此國の道なり
こで國家て君こう人此名位敬ミ給ふと
法とうこやいこそ
父をかぞといひ母位いろこうめでい香わせ

いろい色なりかぞいうぎひうて嗅で匂ひをこう
いろ素い見て色位ちほ香い陽わて貴くく
色い法わ多賤しく父い匂ひを美くびて氣と
清うこちひうぎこくく母ハ名位愛して心位よ
ろこびしひうが如し氣い父り稟つぎ血い母み
うけつぎこれバなり身體髮膚皆父母り
受こうこのかに鼻と眼こは百骸乃尊く
と口耳ハ思ふ法うこう鼻口氣を通て香
味と紐眼耳精を通て色聲と知こと父母子
一骸乃理ひりへべしてこいこ乃下略也父母

の氣乃凝結をしてかたちなり
夫と背といひ婦を妹と
夫婦といひ日本の法と先てを妹背といふ
ゆへあり事なんいにしへ女乃通称なること
若とかいつて夫を對していつれなり背いなる
いらせなりせるもいつれ女をもつなり
此をひくい別乃道ありて柳ゑだをいつを
坂水離火を妹として相對といつれも水ハ
火かいを魁制とる事ありて火よりむくるが故ゆ
水火の氣平和かい得て萬物を化生ハたこと

女よりひくれ別義あるゆへ夫婦和ぎ家へ
そひちと西へく男女ハ生のみちやまぬこと無
よりて知へ又良の卦ハ義理もありて背み止
まる心もあんら
兄とえといひ弟と申くさいて上古よりあるハ孫
通用してこのうへかいつて後よりあふいとば兄として
男子かいついあ孫をい姉として女子かいつて此故
うえいあ孫の友語なり男子の子ハうえと
いひ女子乃このうへかいつ申ことれ申く
をとといひ女ハ申くかいつてまろうみい

子のかしらおくいおくしを人といふるものありおくうを
去いつつ十千の陸湯を分らて兄弟をそなえ
つつ立給ふ先後強柔ありて十千十
二支皆陸湯と分ち河ハ先後陸さう神ゝあるを
甲乙といつゞ如し兄乃甲ハ弟の乙と脚を
書ひ弟乃乙ハ兄の甲にうひずたてゞひ
とく是友悌の道をのづゝ理り和べ
きなり

家乃老臣又ハ町屋村里の長たる者ハ神ゝ
といふ敬ふ或書ふ考へるハ養老年中の比

道君氏首名といふ敬人あり後肥後乃守
さう此人律令に委く仁政と行ひて民を惠ま
陂を築き池を鑿教を垂く民を富饒ハし
百姓とゝの如くをうべ平後後紫の百姓皆其
仁德をたゝへ祠堂を建て神ゝ祭りうと
うや神ゝなれ号ハ神ゝなれ詔つまるべ此故
うや此号後紫ふ多く郷里乃長ハ称を
つまれ神ゝきいふ詞も此首名より始まれ
ハかゝと弥勝の義なり
注言ふ此所の目代とく久のりて出るあるいりゝ

かゝる顔なるがおくまき也都て世の中は人れのを僅より長ぶる事あれいとさほの人を慢ぶる者のいはゆるふたりて身はたらく人はてはたらくものなをまはまれなりとてこれをおくまきものなれしく教訓もつたり用代と云て人はゆ用代と置く百姓をおさめ一家乃村里と仕配をし其用代乃長百姓庄屋と呼もつ今村里の長と庄屋とをつゞめ其の国を地頭の用乃代とありて事を行人なれば正直を敬ふ者い農民の害

となりて百姓困窮ふ及ぶものなりとゆ狂言ふ

もつる歳い上乃用もつ人いつ庄屋ふつれいとこ氣

ゆくなる用代庄屋をとゞめもつ外のいはゆ

ゆもつ人ゆ高位乃人い下に遠くて下官

早役の人れものをいに傲ふ有ふ所を都ふ人

事をはまい俳優乃狂言ふてしやく上ふ

人ゆ乃ものはをしゆゆ乃ものなりゆゆ

法師ふ母ゆいふ狂言い醜物ゆ人をいまゆもつと

乃ゆ狐狸ゆ人いゆ人ゆ人いゆれて後も

諸人いゆ一ふゆ人ゆらひもゆるゆど

酒よろこばれて狂乱をいい醜態のら人もいつ
わりとろの人もいはものでくにて恥ぢいろと色
ものくるあり本分紙先ちゆい狂狸く酒ゆと
何そおくるんはくいくくと酒よ酔ふ人いとんるふ
おのく本分の病とあるいとちう生涯柔和西
直ちう気質の人いるものよそくるひあるしゆすと
事わりて酒乃為くく気血うごれよろこび癸
ひ葬るみでうはくちれ酒い寝てひくうまひ
獨うくい或い気質はこく四ちよ高慢あるく
驕毒用よ蟠まふ人酒酔よ依く気血浮と

勢さ四分の毒気おいしい出怒気傲慢放逸う
あるれ何乃事をれよ罵怒ち座席ち人を欲と
し墓さ酒い勢力を振ひちし妻獲狼藉た
るふるのふし平生の人品威儀温良ふと
しき一時よ元失と酒くふ上戸本性あるい
い思ちうや此ちう聖人も仏祖ち欲酒ち戒め
墓漢といくも未代乃儒者仏者酒と嗜ま
るれさるれふ人くよ古田乃
法師上戸あるくいのくいけくいい色ま
ざんおのくいい乃盃ち屋ちくち書ち

又そのほかいすれたる作いれのとけうんふうて興ど
多世くい成ーをうはくれる草紙を河の人にまて
わをけーいんうあるあ偏屋ちくみて後けーをうんと
ーて先巻端ま興ある詩を書こう奥よい又酒と
色ま紙いまーいふ落しわれどもえる人巻端の神と念
を執して奥ま白紙巻手かし後文神文と債
ちくあるびこ百年いまま世の義人をうこと
ちひきちんといとくいぶくし
人の遍ひりてくやを事ある紙のことりれ話
くーきい稀ま大くきいをちるるるるるひ

あるそひ那ん事ーー世のふくこうあけさあ秋いと
ふれくーえよりやくこうち屋うすしば一家の葉ゆで
あらるびきて後れ稿紙ちくぶし思狂ふー何
ちてくい此ま海ちげけとまるりーいまくくく人い若
き河ちう海くーき聖の文乃理ーこの世ちをぶり
をて新ちて此天ーたち陰陽五行月日乃理ま
など巻巻義のちくーあ白ま世ーへ待ちないあるあ
きはーき意ひをぶなうれぬびきるちてくし
くえ人の神ーを呪ひぐちちい晴きくーれ
ちびれーけくく秋ていくに情日本い神国世い

呪ひ、いつら諺よい世のそろ屈ぐてもあるゆんと
いて使ー呪ひの主意い気紙分ド血紙ちぐーに
乃術ちりと氣血とあるーに快くとろ呪ひ乃第一い
藥紙用るかちり沢よい針とて灸とするし呪ひ
ちりいーー按摩とて外より一身をおでさすうと
い呼息して温め或い息風を吹けて冷ーめうと
嚏を繫ぐ痛ちにあらけるのそぐひみ分見呪
術乃根本ちり神代乃呪ひ止所乃法といへい
今の世乃祈念呪ひてへいーーぐーぐ
世ーりーものいまひとる事ぢかき中に神代ちの

放實あるしいりうとぐ世乃愚昧のいひ傳に
し多ーう草木の中にし民家ー植ーるとろ新
多ー世ーろ人けいひーい酸漿ーいるの紙家乃藩ー
植ーべーあと福ーあるーるーるーぐいーーさ文
なーの中にんぐーどあるまくーみる家ーあれーきーう
ーあ藩笑ありしとーぐ是紙植ーるーう藩笑
多ーあるーるーるーるーる也但神書の中
ーは酸漿とーぐーー訓ーて素盞雄の亡ーあ
大蛇の目ふーーて呪ーちのーーといーーー世草
毒ひれーるーあるーるーるーるーるーる家の藩ー植ーるーー紙

忘れて宵のみん福のうたいあるべくして
柘榴をくわんかの種をうゑかとおもふくらう毋未出紙手
て火災はらあり毋却くうく人家の傍とうゑ新宅後
焼乃祝きは立花あり
客かとうゑばうや是ゑ大満神の師匠坊よ
ほうく給ひ師の坊れ霊の坊かきれいをくめ
を出りて清茶なる柘榴乃実と噛んぐれ妻
戸よ住りを給ひふ火焔くゑ家くもえわし
といつり是ゑ火災のまくて忘事あるん
人う天満神と信しまれ人一せ柘榴賓紙

喰事は神宮の霊物なりまい柘榴而心火焔と
かい給へつりは栗柳何ようりは怒りて吐てやと
なりめひあるべしはまく酒きありもとう飯
ゑで関右折ふりその物を吐りいて火焔はは
事ありない世神信仰乃人又酒を呑んは成い
飯と食とる事をりんう幸ふして柘榴ふき
こりめとおりうかりは世ふ未代の人乃ゑあるうう
ゆりうはりく野すりて柘榴い巳年の月より疫
ゑの色きりあくく赤く火人の色小同しく巳年と火
なり其賓もゑ其赤しまりれ赤き義

あれい実い白きう黒きも実あるいハ多くい
花白し黒くふ花の稀なりひとり稲稻
是なり海て深きのハ花ハ白くうちのみく
うはくしいつれも真精氣大とうたる事あるも也
大ようの所木い石紙ゆくしものちうふ稲稻いてと
このうち石い金氣なるあよ大い金紙得てうの
精氣強盛なりとなりあれも也ハいたしいうち家屋
近く稲の事とうち坂實なりと宮神のゆくよ
いあるべきなり
櫻よい實あるいくしも八きはてうのきくしなハ

實白富ふがうくうたふひとし富ハ人のうちたる家
くいハ金稲のちくい稲ふうこ紙ふこて上ふたいい人の
大医ふれいはくくハ事流のかい種はぎ神こ紙ふ
て実なれい主のくう多くて貴なる人はい一君よ
ひ酢いき處うる紙きふあくめてあ仁ふ世ぞいびは
地をけふあるぐいい土水の氣よ春きゆく夜紙りう
つとしてあひと空紙鄭ふ麹い木大乃うう氣紙
うう仁ふ事春きゆくよ書と事うして夜の履
是つひい種なりまうる紙ふくう郭ハのうぐいい
表紙事うこて書うくう紙時ふい表し教あうと

いへとも樹陰草しけりの下に居て夜高く遠く
鶏の鳴聲あるを常の理とあるさうゆへにこ
れをたりとしてものこしれ人に用事をもとめ
四方の人いそをうれしきやうをよろこびいろいろ感
ゆへて萬の所ひとなる所をいさのこと愛をたのして愛
函乃郭公とぬんとなる時鳥帰鳥淫ふして人の気
蕩うすしかも清かの鶯言う鶯い夜なりてねざ
しれく春より秋までそれ鳴てうたさく郭公い夜
さとく夏ものこ鳴て久しくせめまつとなりて
人なあるなく事なりしかるに郭公は幸なり

平和なる郭公は淫乱の島なりて安穏情慣の物
なりやたのまるるなをもて鶯と鶯の巣なりて
時じて鶯と居いるとやいつまて常の理にあり
さなりのなれはまきなり蜀帝は魂魄しいる
ものあるまきあるかなりてなりへは悲然野者
天地と変事なれは函いへいあり地震洪水大風い天
気大過乃運動い雷物の流気と都して平気ふ
帰るの所なり雷い萬物乃発動と催し促し
地震い土中陽気乃大過を洩し洪水い万物
乃燥気を潤し困濁の気流い大風い暑

聖人造化の気化制作の気化敷伏の気化敷と云ふ天の
常者なれども天地間を経営するものなり人
かわりなく是と云事なしとは物の用物化
そこなひ害を為す故五行の生起二つ者と云
起ることなしてはまことの事全しまた起こる又
起と生とをわかつまた化者と起化者とをわかつ
い人界間の万情意なり天地万物象世の
古今よりわかつ
九穆より福福無門唯人自召といひ又天作孽猶
可違自作孽不可逭といひ古賢の誡め百

民用の要文なり漢用古方に出しかとそこ
感応わかつとまくふかしかはかりの事なり
天作孽猶可違
可逭ものなりて今の家は常盤の家は稀の家は
自作孽不可逭
下の家うちつこれはまてを家はひらるるん
賈誼服鳥賦より福い福の所倚福は福乃所伏憂
喜聚門吉凶同域といつり又同くこの福ゆ
禍くは何ぞ紆つ糾つ縄より異なるん命は不可測
孰か其極をきわめ此一章深玄あるる

書經高宗肜日小天監下民典厥義降年有永肖不永非天夭民民中絶命といふ此句人事一切の要語なれども一身壽夭は係て壽の長短正命非命あらざるを悟明とす

楚辭に善い矛ちあらざれば名い虛しくなるとあり孰ぞ施すべきあらんと雖ども實ありて報ひざるべんや孰ぞ不實ありて獲事わんと雖ども實ありて人世の惑ひ解し侵わる落阱詩小弁に君子無由言耳屬于垣といふ和俗の諺に壁に耳ありと此句もまた君子のふるまひ小人をいましめるとなるべし

一言以身とは一言小身といふ古今甚多くなるべし

家語に孝子曰く支說者流於辭聽者亂於辭知此二者則不以忘といふ世の議論說法儒佛の徧多し皆雜口詩後の賭頁ふして道德の揚頁まはあれども知るべき事也市商の爭ひ利と爭ひ賭頁と為ぶべし

同く云孔子の曰く喪聲之樂喪服之禮喪服之喪此之謂三喪といふ此語實に孔子の語なるべし と雖ども人あり禮儀なくば

礼人の戒しかるに又禮と肉とのみ而已にして和と
捨られ麻しとあるべくもあらず
曲禮に禮い妄ふべからず紙説ひあび繁の費へきび
志い不可極といふ又君子い不盡
人を歡しむる所ならざる白ちう又禮い不忘真字
しいふまてふ異紙和人世を陶ちり
樂記に云く玉不琢器人不學不知道
又嘉肴ありといへども弗食その旨を紙不知
といふ至道ありといへども弗学いふ所善と
不知の害へ勸学に訓誨此旨紙徳とへ

班固が云く安真所習斅所不見終以自蔽と是
学者乃通病なり況や初学に人を初学の人い
いまを知識なくして蔽しる事都てをれ
博覧を聞の学者此蔽又はかりをや
同書に獨学而無友則孤陋而寡聞といふ初
学に人ありしを多くは中く害しちうべきをや
学に友なくして又益友善友を聞まく已
とは今に博学恃識の類よりあり六藝に委
しく五倫の道を窮ひる紙博聞をもとしちうい
善友を求て徳業相勝しる事をく摂り已が

ゝる者は安んずるに足らざるゝ人の善道を聞
き塞ぎ忠臣を疎隔して文華を飾りて
をいてまいわゆる意の固偏野卑なるがゆゑ
なるべし
史記に樊噲曰大行は不顧細謹大禮は不辭
小讓とあり学者吾が行乃懈る事あるべきか
已が非とする事あらば此語を證と今
の世の学者何等の大行大禮ある樊噲が
大行大禮といつるは天下を持つべき志なれば
高祖をたすけて漢を興起せるは大行大禮の

ありなり已今世人の大行大禮いふやいなや
同項羽の至ひ富貴して不帰故郷は如衣繡夜
行誰か知と云る後世人の口實とする句なり
その主意は二つあり一は實の君子ゝ富貴ふ
して故郷よりの親族の長ぜる人を恵し郷人の舊
恩を謝し孤獨貧困恤しべきなりの主意ゝ
郷黨の人を親し交禮数情の業と畏伏せしめん
と欲して故郷を帰るは小人の主意なれば富貴
朱買臣が語まとあり項羽は賢臣の義を知らず
同秦本紀は前事を忘れ後事の師とせざるの

又漢書賈誼ノ傳ニ前車覆後車誡トアリ同意ナリ古者乃歴史ト云ヒ皆此自ノ主意
夫子春秋ノ作又是ノ教誨ニ従ヘリ
董仲舒曰正其義不謀其利明其道不計其功
此ノ句ハ仲舒ノ真儒ナル事明ラカニ善学者ノ益アル所語ナリ之ヲ考ヘキヲヤ又清献公乃
語ニ行好事莫問前程トイヘリ同意ナルモノ
事ハ天理ナルヘシ
易乾文言ニ同聲相應同氣相求水流濕火就燥
雲從龍風從虎聖人作而萬物覩トアリ此語

をもつて見る時は萬物の氣おのゝ類を以て相感
ず惡人は惡氣惡ゝ善人は善氣善と一念
之善は景星慶雲一念之惡は烈風疾雨といる寔
に禍福は己つゝ招く此理影響のごとし
同坤文言ニ積善之家必有餘慶積不善之家必
有餘殃といる是善惡相感ゝ禍福自ら招乃
證文畏かしまされ聖訓なり但佛家の因果之義
と其解異なる處あり輕率に看過すべからず
同云く君子敬以直内義以方外敬義立而德
不孤とは内外の字孟子語ノ事なれ共宿

儒の說を兩立内外の文字小泥むものあらはは
苦子義外乃說又他よりあるべからざるを
同謙乃義よ天道虧盈而益謙地道変盈而
流謙鬼神害盈而福謙是聖人乃訓戒恐々
きれもりしや書大禹謨ゆ滿招損謙受益時
乃天道也云々又豊乃卦ゆ言小日中則昃月盈
則食天地盈虛與時消息而況於人乎況於
鬼神乎といふ天地乃盈虛ゆ鬼神も遵る
事かゝ況や人なるかゆ於てをや亢龍有悔い
とんや萬物よ於てとや

同解乃六爻よ貧且乗致寇至貞吝世間の萬事
みなおのゝ相應と不相應とありて時ゝ不信と
かゝ叶ひ惡とゝもに全く又相應よ肖きゆ者ハ
ゝゝを守りて久しんと欲ともいたゆかゝ吝き
よりて身を失ふ事ゝ世よ多々ゆ人貪ゆて
罪ゆ陷ゆ眞似ゆ賤き人乃責ゆ陷ゆるハ貧て
素のゆゑ也ひそ奴婢ゆ車に乘るよ於れゆ賊
徒ゆて財寶ありやゝ於ゆ是を殺ゆ奪ゆん
終ゆ寇の到ることゆ於ゆ僅よ謹む事ありと
いふゝも此事をい通るゝるあらいとゝゝん

程子三不幸とのたまへる語より少年にして高科に登
ゐいてゝ其不幸なり又兄の勢ひに藉て美官と
なる二つの不幸あり高才ありて文章と能とを
こゝに其不幸ありといつゝ識り有るゝ識あり
今世の学者朱子程子を信仰もてゝ仕
諸とい用ひと子弟と教ゆるゝ此戒訓ゝ
門ゝそいまゝ小学のよりひなるゝ詩文とゝ
事と専要ゝすいうなる故ゝ学の志ゝ
立ゝ唯名を求めて人を騙しおるゝあ
ゝいなるゝ

儒者ゝさまゝあり腐儒草儒曲儒浪儒鞭賈
粉儒顓枉儒近儒覇儒逸儒猴儒真儒ゝり
馮貞白ゝ質言ゝ名ゝゝゝ又此ゝ大儒雅儒俗
儒狂儒賊儒とゝてゝゝゝゝゝ
醫者ゝさまゝありとゝ
正論ゝ出ゝゝ儒醫明醫德醫あり隱醫世
醫僧醫あり名醫時醫浪醫あり女醫好醫
淫醫瘍醫あり又藪醫といふ和俗の誤ゝゝ
野巫醫なりとゝや呪ひ加持ゝ変ゝゝ疫と療
ゝゝゝゝゝゝゝゝ

司馬溫公の六悔銘あり富時不謙貧時悔辭裏
狂言醒後悔官行私曲去時悔健時不藥病時
悔幼而不習老後悔德時不学遇后悔常ふ
塵壁ふ記して毎日拜ミ見るべきものなり

類經摘生の諸ふ與ふ人和者樂大之特與人和者
樂人之俗とあり人生修養の助ある語也

淮南子ふ神越者其言華德蕩者其行偽又
曰人無言而神有言者則傷今慮不得目
止念慮則有為ふ主意あるべ
素問ふ善言始者必會於終善言近者必知其

遠道ふ說人乃ふあんと白なるやや
史記ふ孝子の曰聰明深察ふして近死者好んて
人と議とる者也博辯廣大ふして危其身者
人の惡ふ發く者なり為人子者毋以有己
人乃臣とすべいふく己と有とふる毋れ孔子
曰世家ふ出ふる此句孝子乃孔子ふ教訓道
語なりとみるべふ何を此句ふ孔子門人ふ語
ふ出ふ六經ふ出ざる事いふるやいふ
わるき所あるべ
張氏正蒙ふ我と以く物と視ふ附い則我大也

道にあらざれば道大なり
故に君子は大なるを道とし我を大とする
者は狂と魔となす人倫を大とし
学者はいつまでも尚ほ今の儒佛の
皇極經世書は人の神明は則天地の神明なり
人のうるはしくは天地と敬くなるべし慎哉
いつも礼記の禮運に人者天地之心也といへ
ども同じ主意なるべし但禮記の句意は
仁を主とせり
書の泰誓は天地は萬物之父母惟人は萬物之
靈といへるみな上の語句と一意
詩の蕩之篇は靡不有初鮮克有終といへる誠
なるの毒は世に甚だ多くなり
周瞻卬之篇は哲夫成城哲婦傾城婦人有長舌
維厲之階なりといへり女人の奏才なる故戒め
なり傾城は二字是より初まり傾城といは都て
女をいふ也遊女のこと故いまあるに今の妓女
は古人は戒しなるべしと云へり
女人は多言故牝鷄は晨なるべしと戒めり
書は多方は惟聖は罔念狂なるは惟狂は克

今人い作聖といふ学んで不思ふこれい罔し思て正学とこれい危しといふ所以なり

同周官小作德心逸日休作偽心勞日拙

同秦誓小責人斯無難惟受責俾如流是惟艱哉又云佐々勇夫射御不違我尚不欲

といふ初の語い己が智小慢ふる弊いまつめ後乃白い勇小伐ふ人を戒めて受責如流ふは諫よ順ひ過を改る事流水の速ふ去て還らざるがごとくに胸臆よ過を停しる事なき

弊ふ去ふ去といふ佐々として武篇ぞなるい實乃文ふ文ふ佐々といふ所なるべし

素問小善く天氣言りのい必人よ命と善く古を以者い必今小験ひくといふ此句深意あるべし

人と天と同じ所ざる所なるこれい氣氣生じて理其中にあり人を論ずるに理と生じて氣其命と聽しひ天地の間小盈ちい皆一元氣也氣乃亦又別小元亨利貞なし是と二つよりなしい人よ在くい精神作用皆氣なして其間小主宰ありて差ふこと

あらゆるものは理なり此故に理氣人に在ては
二つなれとも其実は一つなるはあらず天地
は無心なれとも人は欲あるゆへ天地や大儒乃
論なり
文選に瓜田不進履李下不正冠と云者なれ
ども義あるべき語なり又曰未秀を林風必摧行
高於人衆必謗是学者の心得べき句なり
四不闘乃語は誰人も忘れなり不與命闘不
與法闘不與勢闘不與理闘といへり
四不欠の語は春寒秋暑老健君寵皆是又
しかれとも変を又人乃訓へなり
處穴躬四味あり無事以當貴早寢以當富安
歩以當車晩食以當肉といへり貪不處する
乃教ありて富人に教へべき句なり
居郷四紡あり德業相勸過失相規禮俗相
交患難相恤此孫昉が四休あり仍四休居
士に見る麁茶淡飯飽即休補破遮寒暖
即休三平二滿過即休不貪不妬老即休
是又日用なれとも中庸の訓戒なり三平二
滿は妻乃媸こと父乃三平は額とあの頗乃

平らかふして面のあくまを忘れ二満い腹を
胸とくにいとく丈なるもの也つまり悪女といつて
妻い衣食の営みの乏ふしなくてうるわしの
ものしい飢寒ふるをくに耐をしのぶ悪女
あるも同じとなり嬢ら女い我も執着の貪
つとなく又他人の粧をへき妬心裏常
小静ふしてまつはよく貪妬をして老耶安楽
なるの仏殊勝の境界なり
道徳の人といつてもとふおのの身躰の業ハ
しきりもらあつて金銀るもなれ恵

財勝の徳ありとなれ信の人いまく情願
を新くく事あきゆへ銀るもなれ脱の秘
どく称と吏唐土の事いもなれ日本の風
俗禮はよい貴人ようの土民よりおのの
身躰の陸所ありいて人の用ふ解去
ひる事あると人ようの禮はくす是人間と
のはくくは識情なのいんや聖人も仏も元
吏衆生も貴人も正しを身躰の穢物ハみ
ないくきくれ是れ物をひくとハ人の眼よ
解もして其とをけがさとそれの自然れ

人情ちり毛人情ふ法うをて世ちひうくと人を
有のまくいとしいこ〳〵ちうる公見識をそて人
情と駿きこくくきこをとあくいくの
貝紙けいこ法事和曲のこう義ふあくに禮ゐ
あくに者まに文母乃嗹演こあくいこに自然の
誠情ちいくや身け陸ふこや夫人乃服は
神明の業精してきの體乃こと上ちり下ふの教
様ょ通つき鶴しひつ法求ちくに人の法様を
家ひこ乃いものう身體乃神氣公けゞまの
衆ちり又世のまが法様とけこめと人りこを

ちひいくを様との衆非禮の甚き者也此なり
社番れ或ょ路次ょ世あそ様物ょ通て一日こちい
見非ゐけまい悼はとこくに見こうるくてこてひ
みる所い様と受て神前ょ悼りあくどや尤神道
乃戒律乃ある様ちく仏法にて此戒あるりや
法華經安樂行品の中に僧侶乃女人ょ對て法
を說事あるふ世のまとう胸なくに公あくい肌なと
と女人よみをちひる事をくしいこ仏ょいこんや
身の法ふれ穢物をち見こて様ふ公世ちひくさで
あるい儒仏神の穢ょ常々事と云べし

国立公文書館
National Archives of Japan